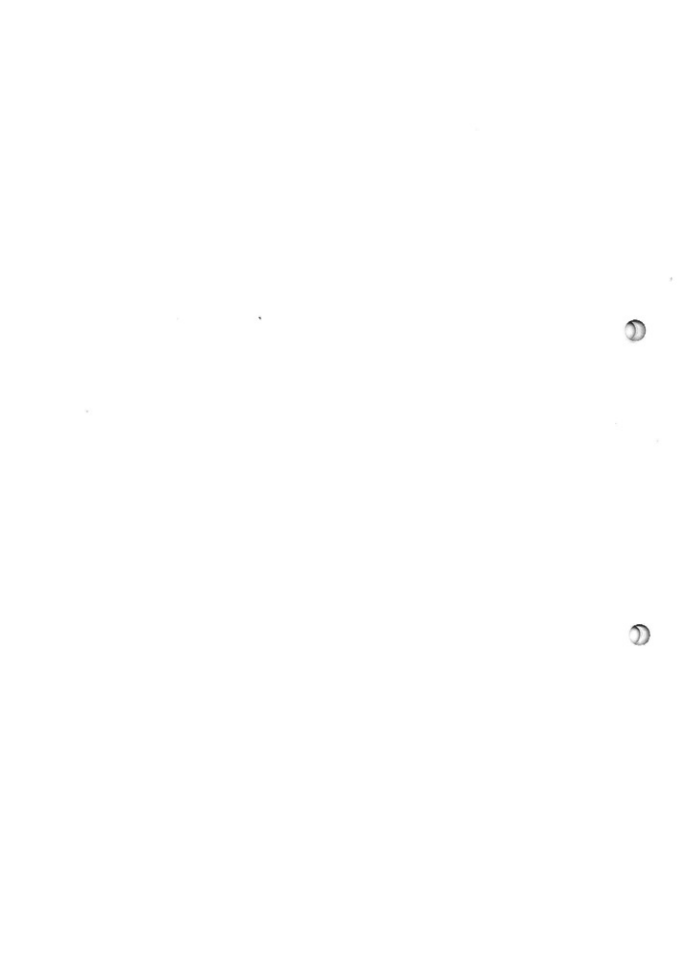


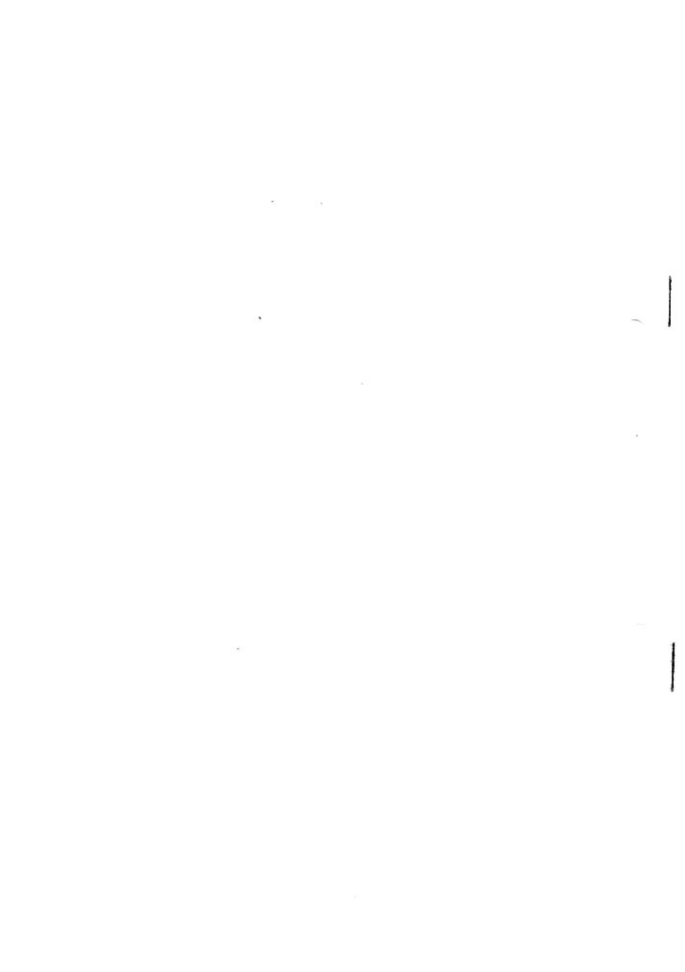
戸田市文化財調査報告 XIII

前谷遺跡発掘調査概要

戸田市教育委員会

昭和53年





序

前谷遺跡は、店舗新築に伴う緊急発掘調査であります。小規模な記録保存のための調査であり、また、調査期間も短かく現在の埋蔵文化財発掘調査の方法からみても決して十分ではなかったかも知れません。

しかしながら、調査の結果は、古墳時代前期前半の方形周溝墓2基、それに戸田市の古代・中世史の一端を綴ることのできる平安時代中期の溝状遺構と、それに伴う灰釉陶器、さらに藤城跡の一部と思われる掘が検出された。

今後は、市民の皆さまの協力を得て、この遺跡周辺の詳細な調査を計画的に実施し、戸田市の古代・中世の人々の生活の実態を究明して行きたいと思えます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、御協力をいただいた学生諸氏に御礼申し上げます。

昭和53年3月

戸田市教育委員会

教育長 岡 田 弘

例 言

1. 本書は、戸田市前谷所在の「前谷遺跡」の緊急発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり、昭和47年8月23日から9月6日まで実施した。
3. 発掘調査の担当者は、伊藤和彦で、塩野 博の指導を得た。
4. 実測図及び出土品の整理は、別記の者が担当者の指導で行った。
5. 写真は、発掘担当者が撮影したものである。
6. 本書の執筆は、文末に銘記した者が行った。
7. 本書の編集は、戸田市教育委員会社会教育課が行った。
8. 発掘調査及び整理には、次の方々の協力を得た。

（発掘調査）

増田逸朗、内田啓人、中島 宏、江口雅宏

島田康夫、杉田光代、内山美紀

（出土品の整理等）

島田康夫、内山美紀、木村由美子、佐藤勝巳

目 次

序	戸田市教育委員会教育長 岡 田 弘
例 言	
はじめに	1
1. 前谷遺跡発掘調査の経過	1
2. 前谷遺跡の位置と環境	1
3. 前谷遺跡の遺構	3
4. 前谷遺跡の出土遺物	6
(1) 第1号方形周溝墓出土の土器	6
(2) 第2号方形周溝墓出土の土器	8
(3) 溝及び土壇出土の土器	10
おわりに	12

はじめに

埼玉県の南部、ことに旧入間川（現荒川）低地帯に於ける総合的な学術のメスが入れられていない真空地帯に於いて、戸田市は、その中心地として、地理学、歴史学、植物学上大いに興味をもたれていたところである。昭和42年に偶然にも発見された一片の土器から、考古学史上貴重な遺産として「鍛冶谷・新田口遺跡」の発見となり、その後も、戸田市の調査を通して、県史上にも残る数多くの新発見、新事実を提供してきた。

首都に隣接する戸田市は、急激な社会構造の変移とともに、都市化が目覚しく、新興の都市として、日増しに景観が推移している。それとともに貴重な埋蔵文化財等が、破壊、消滅の危機にせまられているところから、戸田市教育委員会は、文化財保護行政に一層力を入れ、遺跡台帳の整備、各機関との連絡協同を図り、また、郷土愛の高揚を図る多様な施策を実行し、さらに遺跡の保存に努力してきた。

（伊藤和彦）

1 前谷遺跡発掘調査の経過

昭和42年に弥生時代後期の遺物が、掘削の間から出土し、「埴橋」遺跡と命名された場所に近接した空地に、大型スーパーが建設されるとの情報が郷土史愛好家によって教育委員会に通報された。教育委員会は、早速担当者に命じて調査をさせたところ、建設は具体化され、市の建設部に建築確認の申請がなされた。そこで、教育委員会は、文化財保護委員会を開き、今後の措置について検討した結果、戸田市の埋蔵文化財の無秩序な破壊を防止するため、善後策を協議した結果、「埴橋」遺跡の一部にかかるため、早急に発掘調査を行わなければならないとの結論に達し、記録保存の措置をとることになった。なお、この遺跡の名を前谷遺跡と命名した。

発掘調査は、教育委員会の伊藤が担当者となり、国学院大学学生、東洋大学学生、地元有志、また県文化財保護課の協力を得て、昭和47年8月23日から9月6日まで行なった。（伊藤和彦）

2 前谷遺跡の位置と環境

遺跡は、埼玉県戸田市上戸田2丁目26番地（戸田市大字上戸田字前谷）にある。附近はすでに土地区画整理事業がほぼ完了し、整然としている。東京から近く、戸田橋を経て17号国道（中仙道）に近接し、早くから拓けた地である。現在は、住宅・商業の中心地となっている。

この遺跡は、標高5m弱の旧入間川（現荒川）の流路に並行して発達した、東西にのびる細長く不規則な自然堤防上の南側に位置する。この自然堤防は、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする低平な微高地である。おおまかな層序を示すと、表上は、氾濫原特有の粒子の細かい砂混りの灰色を呈した土である。この土層の下に、黒色土があり、硬くしまっている。そして、第3層目が基盤の黄褐色粘土層である。なお基盤は厚さ約1～2m位であり、さらに下層は砂層とな

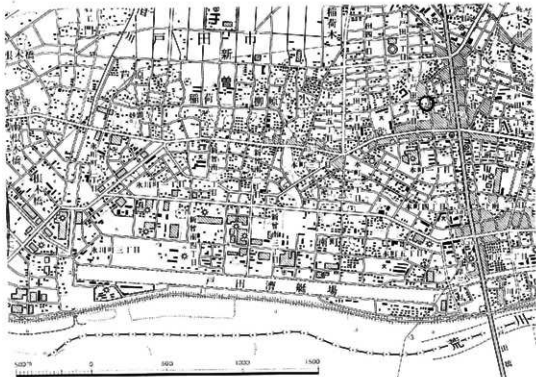
っている。

遺跡の付近には、すぐ東側に隣接して、「葦城はどこにあったか」（昭和43年 岡田恒三郎著）で紹介されている中世の館城跡の土塁の一部が残存する場所があり、また、同堤防上の700 m程西に方形周溝墓群で著名な「鍛冶谷・新田口」遺跡が位置している。さらに、南西にむかって約1 Km程の所に、方形周溝墓・円形周溝墓・古墳時代各時期の集落跡及び古墳の周溝・中世の館跡等複合遺跡として知られている「南原遺跡」がある。

なお、現段階では、この遺跡が、旧人間川の自然堤防上で発見された最東端の遺跡である。（伊藤和彦）



第1図 埴橋出土の土器



第2図 前谷遺跡の位置（○印）

3 前谷遺跡の遺構

前谷遺跡の遺構概観 前述のような経緯で緊急発掘調査が実施された「前谷遺跡」の狭い調査区
内では、次のような遺構が検出された。

すなわち、方形周溝墓2、溝状遺構8、土壇5、ピット群である。

前谷遺跡の標準土層の堆積状態は、最下層の黄褐色土（ローム層）の上に、ロームブロックを混
入した黒色土があり、最上層は、灰褐色を呈した表土層である。なお、検出された遺構は、最下層
の黄褐色土に掘り込まれたものである。

第1号方形周溝墓（第3図）〔図版第1・2〕 調査区中央で検出されたものである。周溝は、
部分的な攪乱もあるが、隅丸方形プランを呈し、西溝は、中央部にブリッジを有している。規模は、
南北12.2m、東西13.3mを測る。溝の幅は、1～1.30mである。深さは、それぞれのコーナー部分
が高くなっており、舟底形を呈しているが、その中に、土壇状の掘り込みがみられる。また、西溝
は、漸次浅くなり、その先端は角形を呈している。この両溝の途絶えた部分、すなわちブリッジの
幅は約4mである。

溝内の堆積土は、最下層にロームブロックを含む黄褐色土、その上に黒褐色土、さらに焼土を含
む黒褐色土が堆積していた。

遺物は、底面から浮いた状態で、北溝及び南溝の土壇状の掘り込みの中から検出された。

第2号方形周溝墓（第3図）〔図版第3〕 調査区北西隅で、その一部が検出されたものである。
周溝のプランは、第1号方形周溝墓とは違い、円形化したものである。周溝の幅は、70cm程である。

検出された南溝を見るに、溝のほぼ中央が浅くなっており、そこから漸次中央に向かって深くなっ
ている。

溝内の堆積土は、最下層に粘性の黒色土、その上に砂層、黄褐色土の粒子を多量に含む黒褐色土
である。

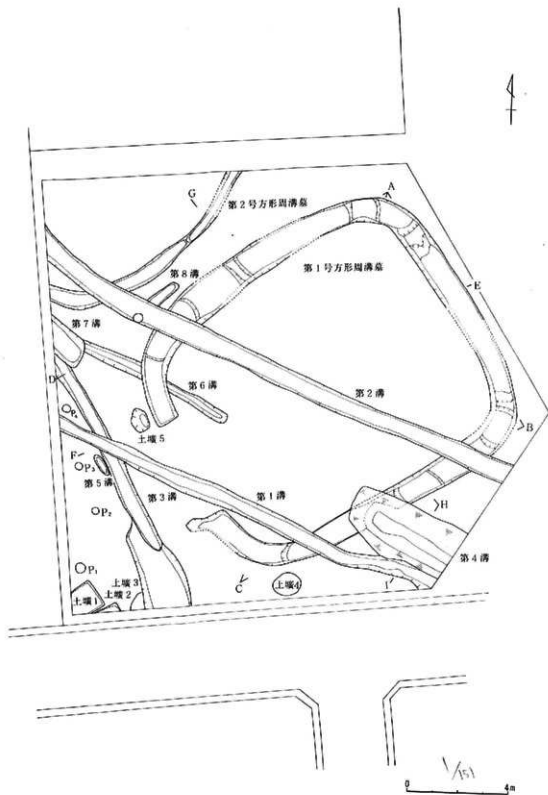
遺物は、西隅の溝内から高坏脚部、壺形土器の底部が検出された。

第1溝（第3図）〔図版第4—(1)〕 調査区内南側を北西—南東に走る上幅70cm、底幅40cm、深
さ平均30cmの溝で、延長16.5mにわたって検出された。この溝は直溝であるが、調査区南東隅で若
干折曲し、第4溝の大溝を切っている。また、西隅でも第3溝を切っている。

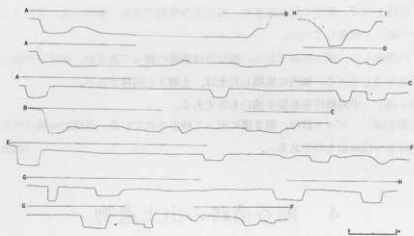
なお、溝内には、赤色粒子を含んだ茶褐色土が堆積していた。

第2溝（第3図）〔図版第4—(2)〕 第1溝の4.60m北寄りに位置し、第1溝とはほぼ平行に北西
—南東に走る溝である。西側は若干北に曲っている。また、東側は攪乱のため追求不可能であった。
また、溝内には、第1溝と同様に赤色粒子を含んだ茶褐色土が堆積していた。

第3溝（第3図）〔図版第5—(1)〕 調査区南東隅に検出された断面皿状の浅い溝で第1溝及び
第3溝に切られている。この他の溝と方向が違い北北西—南南東で、約8.70m検出した。上幅は70
cm、底幅40cmである。溝内には、黒灰色の土が堆積しており、その中から、灰釉陶器や須恵器、土
師器が検出された。



第3図 前谷道跡遺構全測図



第4図 前谷遺跡遺構断面図

第4溝(第3図)〔図版第4-

(1) 調査区南東隅でその一部を検出したものであるが、溝というより「堀」である。上幅2.20m、底幅40cm、深さ1mの菜研掘りである。調査区内では、角形に掘られた堀端から約4.50m検出したが、このまま直線的に南東方向へ伸びるものと推察される。

第5溝(第3図) 第3溝の西側に検出された長さ1m、幅30cmの小規模な溝である。

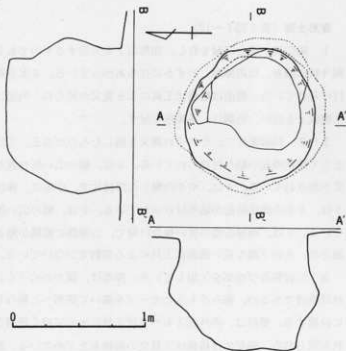
第6溝(第3図) 第1溝と第2溝の中央を走る溝端丸形を呈する幅60cmの浅い溝で、調査区西側は、第7溝に切られている。なお、調査区内では約6.50m検出した。

第7溝(第3図) 第4溝に相対する溝であるが、上幅1.20m、深さ50cmで規模は小さい。

第8溝(第3図) 西側を第2溝で切られており、東側約1.20mを検出した。上幅は40cm、深さ35cmを測り、溝内最下層には、ロームブロックを混入した黒褐色土が堆積していた。

土壌1・土壌2(第3図) これらは、深さ約20cmの方角を呈する土壌で、壺内には、ロームブロック、赤色粒子、カーボン粒子を少量含んだ黒色土が堆積していた。

土壌3・土壌4(第3図・第5図)〔図版第5-(2)・(3)〕 これらの土壌は、円形を呈するものである。



第5図 土壌4実測図

土壌3は、直径1.30m、深さ1.10mを測り、掘り方を垂直である。境内には、黒色土と汚れたロームブロックが混って堆積していた。

土壌4は、直径約1m、深さ95cmである。掘り方は垂直に掘ってあるが、中ほどが膨らみ、所謂袋状土壌の形態を呈している。境内に堆積した土は、土壌3と同様である。

土壌5（第3図） 平面楕円形を呈す浅いものである。

ピット群（第3図） ピット群は、第3溝に沿って検出されている。直径30cm程の円形を呈するもので、深さは5～10cmのものである。（塩野 博）

4 前谷遺跡の出土遺物

(1) 第1号方形周溝墓出土の土器

壘形土器（第6図1～12）

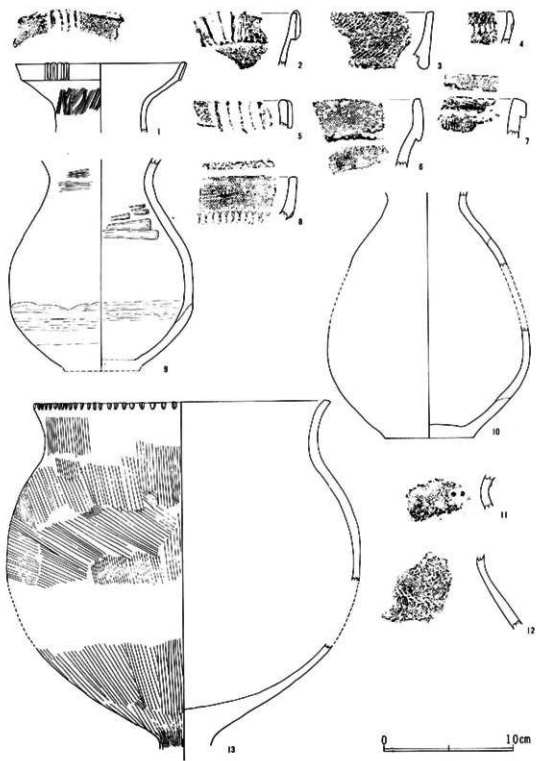
1. 幅の狭い複合口縁を有し、頸部以下を欠損するものである。口縁部が頸部から外反しながら漏斗状に開き、口辺部が、わずかに立ちあがっている。4本を単位とする棒状隆起が4か所に貼り付けられている。器面は櫛歯状工具による施文が見られ、内面は、ヘラ状工具で整形している。胎土焼成とも良い。色調は、茶褐色を呈す。

2～8、口縁部片で、それぞれ縄文を施したものである。2は、幅の狭い複合口縁で4本を単位として棒状隆起が貼り付けられている。3は、幅の広い折り返し口縁で、ほぼ中央部にS字状結節文が施されている。4は、やや内彎した口縁片で、中央に、棒状工具による突刺文が施されている。5は、5本の棒状隆起が貼り付けられている。6は、幅の広い複合口縁で、R Lの細縄文が施されている。7は、肉厚の幅の狭い複合口縁で、口唇部に細縄文が施されている。8は、R Lの細縄文が施され、その下端を荒い櫛歯状工具による突刺文がついている。

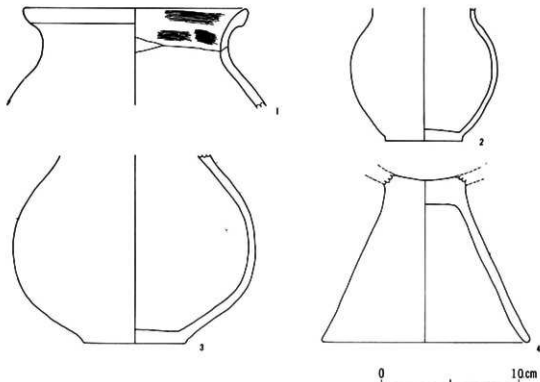
9. 口縁部及び底部を欠損している。頸部は、緩やかに「く」の字状に折れる。胴部は、中央でほぼ垂直であるが、膨みをもったカーブを描いて底部へと移行している。胴部最大径は、やや下方に位置する。整形は、内外面ともヘラ状工具によって良く研磨され、平滑であるが、若干器面に荒れが見られる。頸部には櫛歯状工具文の痕跡もとどめている。胎土、焼成とも良く、堅緻である。色調は、薄茶褐色を呈す。

10. 口縁部及び胴部を欠損するが、図上復原可能な土器である。頸部は、緩やかな「く」の字状を描き、胴下方に最大径をもち底部は平底である。整形は、内外面ともヘラ状工具によって良く研磨され、平滑である。胎土は、良く精選されており、密で焼成も良好である。色調は、茶褐色を呈す。

11～12. 11は、頸部片で、細縄文が施され、その上に2個の円形浮文が貼り付けられている。12は、胴部片で、細縄文が施され、S字状結節文がそれを界している。



第6图 第1号方形周溝墓出土の土器実測図



第7図 第2号方形周溝墓出土の土器実測図

台付壘形土器（第6図13）

胴中央部及び脚部を欠損するが大形の台付壘形土器である。頸部は鈍く「く」の字状に折れ、口縁部は外反している。胴最大径がやや上半部にあり、そこから緩やかなカーブをもって脚部へ移行する。内外面櫛歯状工具による施文が見られる。胎土は、若干砂分が多いが、良く精選されている。焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈すが、全面にススの付着が認められる。

(2) 第2号方形周溝墓出土の土器

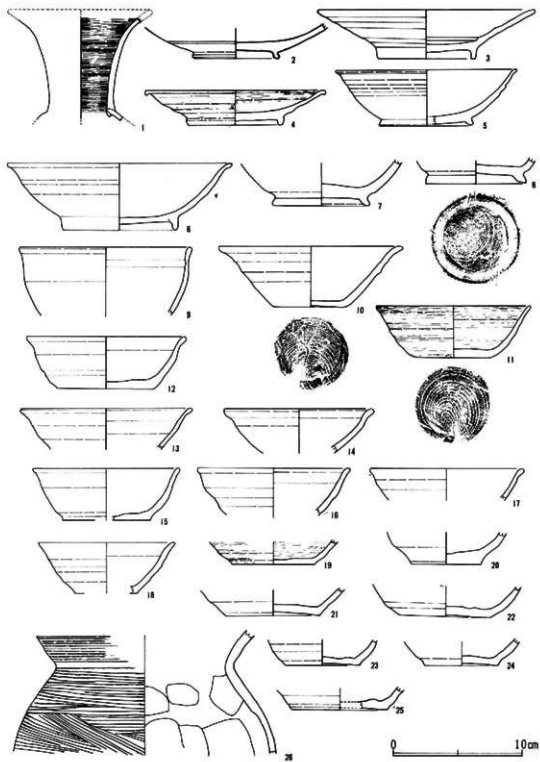
壘形土器（1～3）

1. 頸部は「く」の字状に鋭く折れ、膨みをもった稜をもつ有段口縁である。内外面ともへら状工具による整形が施されているが、内面には、荒い櫛歯状工具の施文をとどめている。胎土は、良く精選されており、焼成も堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。表面には丹が塗ってある。

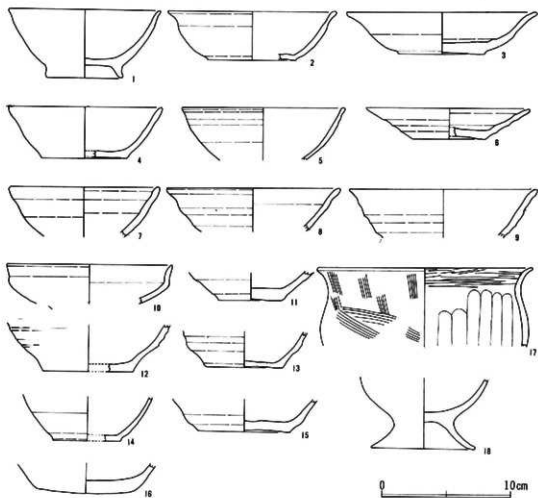
2. 口縁部を欠損しているが、あとは残形をとどめている。最大径がやや上半部に位置しているが、緩やかな膨みを描いて底部へとつづいている。底部は平底である。内外面ともへら状工具で良く研磨され、胎土、焼成とも良好である。色調は、茶褐色を呈す。

3. 頸部より上を欠損している。最大径がほぼ中央に位置し、緩やかなカーブをもって球形に近い形を成している。底部は平底である。内外面ともへら状工具によって良く研磨されており、胎土、焼成とも良好である。色調は黄茶褐色を呈す。

4. 大形の高環形土器の脚部である。「八」の字状にほぼ直線的に開いている。内外面ともへら



第8図 第3溝出土の土器実測図



第9図 第3溝出土の土器実測図（土師器）

状工具によって良く研磨整形されている。胎土も良く精選されており、焼成も堅緻である。色調は、茶褐色を呈すが、表面には丹が塗ってある。

(3) 溝及び土壙出土の土器

第3溝出土の陶器及び須恵器（第8図）

1. 口唇部を欠損する長頸壺の頸部である。内外面とも緑色の釉がかかっている。

2～3・5 灰釉陶器の高台付皿である。3は、内面に淡灰色の釉がかかっているが、器面は粗雑である。3は、部分的に欠落しているが、ほぼ全形を留めている。内面に段を有しているが、ラインは直線的である。内面に淡灰色の釉が塗ってある。胎土は良く精選されており、焼成も良好である。5は、やや深い皿であり、緩やかに内彎している。内面には淡灰色の釉が塗ってある。胎土は良く精選されており焼成も良好である。

4. 高台付の須恵器皿である。口唇部が外反している。
- 6～7. 高台付の杯であり、いずれも、底部に糸切り痕を残している。
- 8～17. 杯の口縁片であるが、10, 11は、ほぼ完形である。
- 19～20. 平底の底部である。
- 21～25. 底部がやや上げ底である。
26. 壺形土器の破片であるが、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部には横ナデ痕が見られる。肩部には荒い櫛歯状工具による施文がみられる。

第3溝出土の土師器(第9図)

1. 高台付の碗である。胎土は、砂粒子を多く含んでおり、器面が荒いが、焼成は良好である。内面は黒色であるが、外面は、茶褐色である。
- 2～10. 杯形土器の口縁部破片である。いずれも胎土、焼成とも良好である。
- 11～16. 杯形土器の底部片である。
17. 壺形土器の破片であるが、口縁部が緩やかに外反している。外面は、荒い櫛歯状工具によって整形されているが、内面はへう状工具によって整形されている。胎土には砂粒子を含んでいるが、焼成は堅緻で良好である。色調は、赤茶褐色を呈す。
18. 台付壺形土器の脚部である。脚部は、わずかに外反している。付根部分に横ナデ痕が見られる。胎土は、砂粒子を多く含み、器面は荒い。焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈し、部分的にススの付着がみられる。

第4溝出土の土板(第12図)

表面は平坦であるが、裏面は若干荒れている。2孔が有り、いずれもヒモづれの痕跡が認められる。胎土は良く精選されており緻密である。焼成は堅緻で良好である。色調は茶褐色を呈している。

第7溝出土の土器(第11図1～3)

1. 口唇部がやや外反し、上げ底の杯形須恵器である。
- 2～3. 杯形土師器片である。

第1土壙出土の土器(第10図1・2)

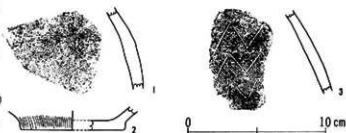
1. 壺形土器の肩部破片で、細縄文が施されている。
2. 壺形土器の底部破片であり、平底である。

第3土壙出土の土器(第10図3)

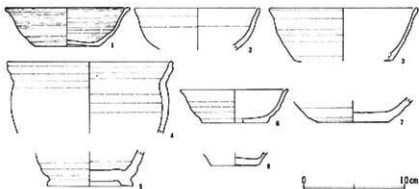
壺形土器の肩部破片である。細縄文が施されているが、連続山形文内は消されている。胎土、焼成ともに良好で、丹が塗ってある。

第4土壙出土の土器(第11図4～8)

4. 壺形土器の破片である。口唇部がわずかにくびれており、頸部はゆるやかである。口縁部は、



第10図 土壙1(1～2)・土壙3(3)出土の土器実測図

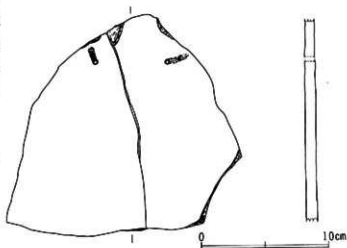


第11図 第7溝(1~3)・土坑4(4~8)出土土器実測図

ヘラ状工具で整形されている。また内面は、布状のもので横に整形されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。色調は、淡茶褐色を呈している。また、部分的にススの付着がみられる。

6~8、坏形須恵器片である。いずれも底部に糸切り痕がみられる。8は、高台付で厚手である。

(伊藤和彦)



第12図 第4溝出土土板実測図

おわりに

以上、前谷遺跡緊急発掘調査の概要を述べた。最後に、この調査の結査を整理し、前谷遺跡の性格を把握しておきたい。

方形周溝墓 今回の調査では、狭い地域ではあったが、2基検出された。そのうちの1基は、完掘することができたが、他の1基は、その一部の検出で終わってしまった。第1号方形周溝墓は、方形の一辺中央部が切れている、いわゆるブリッジを有するもので、戸田市内では、南原第1号方形周溝墓^(註1)がある。第2号方形周溝墓は、円形化したプランを有するもので溝の幅が狭いものである。この類のものでは、鍛冶谷新田口遺跡の新田口第6号方形周溝墓や、南原第5号方形周溝墓^(註3)がある。

さて、前谷遺跡の方形周溝墓であるが、その主要時期は、溝内から検出された土器をみると、古墳時代前期前半の五領1期の範疇で握えられるものである。

また、この前谷遺跡に近接して、埴溝遺跡があるが、この遺跡では、弥生時代後期の弥生町期の

(註4)
土器(底部穿孔土器)が発見されており、この時期の集落跡(整穴住居跡及び方形周溝墓)の所在を推定することができる。また、現に前谷遺跡でも、弥生前期の土器片が検出されている。

溝遺構 溝遺構は8本検出された。そのうち、3本(第1・2・6溝)は、同方向に走る幅の狭い溝である。これらの時期については不明である。しかしながら、第3溝は、浅く断面皿状を呈した溝であるが、この溝からは灰軸陶器・須恵器・土師器が検出されている。これらの土器類をみると、須恵器は底部が大きく糸切りの後に端の部分に再調整を有する坏が主体で、灰軸陶器のいわゆる段皿や皿、内黒土師器よりも時期的には古い様相を呈しており、加治丘陵や南比企丘陵の窯跡群で生産されたものと考えられる。

また、灰軸陶器は、胎土・焼成とも良好なもので、東海地方の生産であることは疑いもない。時期的にみても、10世紀中葉から後葉にかけて生産されたものである。したがって、この溝の時期は、平安時代中期のものと考えられる。

第4溝は、前述したように薬研堀りの堀である。この前谷遺跡は周辺に「塙構」「竹ノ内」「左衛門屋敷」「戸田御所」「雑色」等の地名が残っていきよように「蕨城」とよばれる館跡の一角である。^(註5)現在、この蕨城は、土塁の一部が残存してはいるが、その縄張りは、今後の精査を待たなければ見当がつかない。この前谷遺跡調査区内で検出された堀は、その規模及び調査区内で切れていることなどから、単なる水路とは考え難く、蕨城の堀の一部と考えた方が妥当である。なお、この堀の時期については、不明である。

小結 以上、前谷遺跡検出の遺構及び遺物について概略まとめてみたが、都市化の激しい戸田市内のごく限られた地域の発掘調査ではあったが、前谷遺跡で検出されたそれぞれの遺構や遺物は、戸田市の成り立ちをみる上で、きわめて貴重である。特に10世紀代の遺構遺物は、先に南原(高知原)遺跡で検出されてはいるが、さらに資料が増加した点で重要である。また、蕨城の一部と考えられる掘遺構も今後の蕨城跡研究の大きな足掛りとなる。

(塩野 博)

註1. 塩野 博・伊藤和彦「南原(高知原)遺跡第1次発掘調査概要」『戸田市文化財調査報告Ⅱ』戸田市教育委員会 昭和45年3月

註2. 塩野 博・伊藤和彦「鍛冶谷・新田口遺跡-方形周溝墓群の調査-」『戸田市文化財調査報告Ⅲ』戸田市教育委員会 昭和44年3月

註3. 塩野 博他「南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要」『戸田市文化財調査報告Ⅴ』戸田市教育委員会 昭和47年3月

註4. 伊藤和彦「塙構遺跡出土の土器」『鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報』戸田市文化財調査報告Ⅰ所収 昭和43年3月 戸田市教育委員会

註5. 岡田恒三郎「蕨城はどこにあったか」

图版第 1



(1) 第 1 号方形周溝墓



(2) 第 1 号方形周溝墓北溝





(1) 第 1 号方形周溝墓溝內土器出土狀態



(2) 第 1 号方形周溝墓溝內土器出土狀態



图版第 3



(1) 第 2 号方形周溝墓



(2) 第 2 号方形周溝墓溝内土器出土状态



図版第 4



(1) 第1溝及び第4溝（水が溜っている）



(2) 第2溝





(1) 第1溝(中央)と第3溝



(2) 土坑 3



(3) 土坑 4

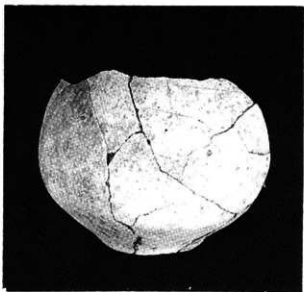




1



2



3

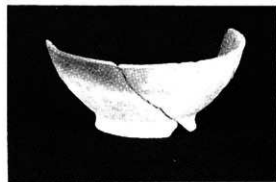
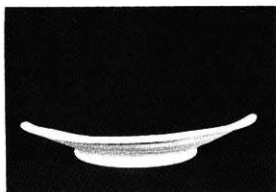


4

方形周溝墓出土土器 (1)第1号出土。(2~4)第2号出土



图版第 7



第 3 溝出土土器



戸田市文化財調査報告 XIII
前谷遺跡発掘調査概要

昭和53年3月31日発行

発行 戸田市教育委員会

印刷 株式会社 青松社

C

C

